様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　6　月　20　日現在

機関番号：24403
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号：21890227
研究課題名（和文）　インターフェロン療法が終了したＣ型慢性肝炎患者が抱く不確かさ

研究課題名（英文）　Factors influencing uncertainty experienced by patients with chronic hepatitis C after interferon therapy.

研究代表者
長谷川　智子(HASEGAWA SATOKO)
大阪府立大学・看護学部・助教
研究者番号：40508800

研究成果の概要（和文）：
インターフェロン療法（以下 IFN 療法）が終了した C 型慢性肝炎患者が抱く不確かさを，明らかにする目的で研究を行った.筆者がこれまでに実施した質問紙調査を再分析した結果では，C 型慢性肝炎患者の不確かさに，医師の説明満足度と POMS 下位尺度「不安―緊張」の 2 要因が関連していることがわかった.
今回は，IFN 療法が終了した C 型慢性肝炎患者４名に半構成的面接法による質的分析を行った．その結果，IFN 療法を行い治療効果が認められた患者では[新しい人生の獲得][再燃への不安]を，治療効果が認められなかった患者では[低空飛行で生きる人生][治療を耐えたにも関わらず効果のない落胆]を語っており，IFN 療法に対する思いが治療結果により大きく異なることが明らかになった.

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to clarify factors influencing uncertainty experienced by patients with chronic hepatitis C after interferon therapy. Two factors were identified: degree of satisfaction with doctor’s explanation and the “anxiety-tension” subscale of POMS.
Tape-recorded interviews were conducted with four patients. Data were analyzed qualitatively and categorized based on similarity of experience. From the interview data, sustained viral response (SVR) patients said “Acquisition of a new life” and “anxiety about recurrence”. Non-respond patients said “Life which it lives by low-altitude flight”, “Disappointment which is ineffective though it was patient of treatment”. It was revealed that patients’ expectations with respect to interferon therapy are quite variable depending on the results of treatment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	680,000	204,000	884,000
2010 年度	940,000	282,000	1,222,000
総　計	1,620,000	486,000	2,106,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護
キーワード：看護学，C 型慢性肝炎，IFN 療法，外来看護

１．研究開始当初の背景

わが国のＣ型慢性肝炎患者は約 170 万人と推定される．C 型慢性肝炎患者の多くは肝硬変，肝がんへと進行するため，がん化に対する患者の不安は大きい．肝がんによる死亡は年間３万人を上回っており，肝がんを発症したのちの医療費はＣ型肝炎に対する医療費よりも甚大であるため，国をあげてのＣ型肝炎対策が急務の課題となっている．

日本における IFN 療法は，2002 年から Peg-IFN/Ribavirin 併用療法が開始されるとウイルス排除率は 48%にまで上昇した[1]．しかし，それでもまだ治療を開始した 50%の患者はウイルス排除ができない状況にある．ウイルス排除できない場合は，自覚症状はなくとも，病状の進行を阻む目的で，引き続き検査や治療が必要となる．C 型慢性肝炎患者はこのように不確実な IFN 療法に，ウイルス排除という期待を寄せ，IFN 療法開始時には自覚症状がないにもかかわらず，身体的・精神的・経済的負担を強いられつつ，治療を続けているのが現状である．

C 型慢性肝炎患者の不確かさについては，病気の進行が不確かさの一因となるという報告がある（Conrad，2006）．Gail（2002）は，不確かさとうつが相関していると指摘している．病気や治療に発する不確かさは，いずれ生活に波及し，結果として患者の QOL を低下させる．IFN 療法に関する研究では，療法中の患者の QOL を検討したものはあるが[4][5]，IFN 療法が終了した患者の QOL や不確かさに着目した研究はほとんどない．

1)林紀夫，小林嗣子，平松直樹(2008)；C 型慢性肝炎治療の変遷，日本消化器病学会雑誌，105(2)，1-11.

2) Conrad,Sue and Garrett,Lynadall E.and Cooksley,W et all(2004)；Living With Chronic Hepatitis C Means `You Just Haven`t Got a Normal Life Any More`, Chronic Illness, 2(2), 121-131.

3) Gail Schoen Lemaire.(2002). Predictors of depression and uncertainty in women with Polycystic ovarian syndrome：hyperandrogenic symptoms are associated with emotional distress.

4)福原俊一，日野邦彦，加藤孝治，富田栄一，湯浅志郎，奥新浩晃（1997）．C 型肝炎ウイルスによる慢性肝疾患の Health Related QOL の測定．肝臓，38(10)，587-595.

5)濱田佳代子，宮腰由紀子，井上正規，高橋洋一(2005)．Interferon 療法開始後 3 ヶ月までのＣ型慢性肝炎患者の QOL　Self-efficacy. 4(2)，59-66.

2. 研究の目的

福原[4]や濱田[5]，筆者の研究で IFN 療法は，C 型慢性肝炎患者の QOL や生活満足度に強い影響を与えていると報告されている．

(1)C 型慢性肝炎患者の不確かさに関する質問紙調査の再分析(2)IFN 療法を終えたＣ型慢性肝炎患者へのインタビュー調査を実施し，生活に強い影響のある IFN 治療を終えた患者の病気の受け止めと不確かさの認識をこれまでの研究結果も参考にし，明らかにする．

３．研究の方法

(1)C 型慢性肝炎患者の不確かさに関する質問紙調査の再分析
①対象：外来通院中のＣ型慢性肝炎患者
②方法：質問紙調査
③分析：量的分析

(2)IFN 療法を終えたＣ型慢性肝炎患者へのインタビュー調査
①対象：外来通院中のＣ型慢性肝炎患者
②方法：半構造化面接
③分析：質的分析

４．研究成果

(1) C 型慢性肝炎患者の不確かさに関する質問紙調査の再分析

①対象:C 型慢性肝炎患者 119 名(男性 52 名，女性 67 名)

②方法：質問紙調査

③倫理的配慮：倫理委員会の承認を受けると共に対象者の自由意思による参加と結果の匿名性について文書と口頭で説明し，同意を得た.

④結果：平均年齢 63.1±10.8 歳，IFN 療法中の患者 38 名，IFN 療法をしていない患者 81 名，不確かさと関連があったものは医師の説明満足度とセルフエフィカシー(以下 SE)，POMS であった．C 型慢性肝炎患者の不確かさは，医師の説明満足度と POMS 下位尺度「不安―緊張」の 2 要因でR^2=.769 であった．IFN 療法の有無によって，不確かさ得点に差は見られなかった.

⑤考察：C 型慢性肝炎患者の不確かさは，SE や POMS の要素を含むものであると考えられる．IFN 療法の有無と不確かさの関連がなかったのはウイルス除去を目的としない 70 歳以上の患者が多く含まれており，不確かさへ影響するほどの副作用症状等の問題が少ないためと考えられる.

(2) IFN 療法を終えた C 型慢性肝炎患者へのインタビュー調査

①目的：IFN療法後患者へインタビューを行い，どのような思いでいるのか明らかにする.

②対象：消化器内科外来通院中で，ウイルス排除目的のIFN療法を終えた壮年期のC型慢性肝炎患者4名．男性・女性各２名.

③方法：半構造化面接を実施した．面接は30分～50分で内容は逐語録に起こした.

④分析：逐語録よりテーマにそくした文章の内容を吟味してコーディングし，さらに類似するコードを比較分類し，カテゴリー化を行った.

⑤倫理的配慮：大阪府立大学看護学部と実施病院の研究倫理審査委員会により承認を得た手順に従い，対象の同意書を得て面接を実施し，匿名性に配慮して研究データを扱った.

⑥結果：IFN 治療中の経験と治療後の思いについて知ることができた.

治療中の経験：[活動に伴う貧血症状のつらさ][情緒的不安定さ][外観の変化への気がかり][治療の継続のために求められる努力][効果が不確かな治療を継続するやるせなさ]を経験していた.

「仕事してるけど，やっぱり貧血とかもあるから余計か，何ですかね，すぐ息もあがるし.」

「ちょっとしたことで泣けてきたり，イライラしたり.」

「(何カ月かしてから」わっ，なんか髪の毛抜けるし，ここ何か薄くなったな」

「僕の場合は，やっぱり職場に，木曜日の朝って割と忙しいんですよ．ほんで，それを朝半日，有給取ってくるというのね，その辺りのことですね.」

「確実に効くんやったら１年我慢して・・・とかって思うんです．前回治療したときも，もしかしたら，消えるかもしれないって，効きにくくて『併用療法で，前よりも効くようになってるし』という言葉で，多分めっちゃ期待してたとこがどっかにあって・・・」

治療後の治療に対する思い：治療効果が認められた患者では[新しい人生の獲得][再燃への不安]を，認められなかった患者では

[低空飛行で生きる人生][治療を耐えたにも関わらず効果のない落胆]を語っていた.

「うまくいけば，もう，また，新しい人生が始まります.」

「再燃，再燃でびびってたから.」

「生きるのには大丈夫やけど，低空飛行で，『何かをガーッてやろか』とかいう気には，なれない．何か激しく動いたら貧血やし，倒れるかもしれんとか，ずーっと顔色も悪いし.」

「しんどいけどウイルス消えへんて，どういうこと？」

⑤考察：IFN 治療は，副作用を抱えながら少なくとも半年以上継続する必要があり，治療によってウイルス排除できる確率は60％程度である．治療中の患者の経験は，この治療の特徴を反映すると考えられる．今回の対象は特に壮年期であり，仕事や家庭内での役割をとりながら治療を継続するために，心身の負担は大きいと推測される．さらに，治療効果の有無は治療後の思いを左右していた．心身の負担が大きな治療を行っても，効果が認められない場合もあり，治療から治療後に至る患者を支える看護の必要性が示唆された．

(3)結語：IFN療法が終了したC型慢性肝炎患者が抱く不確かさは，IFN療法の結果に影響を受けることがわかった．またIFN療法が終わった後でも，C型慢性肝炎患者は何らかの不確かさを抱えていることも示唆された．

現在IFN療法は，患者の持つウイルスの型や年齢・持病の有無など様々なことを考慮した上で，実施されている．その現状を考慮し，今回のインタビューガイドを見直し，対象者を絞り込んだ複数の施設でインタビュー調査の必要がある．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

① Satoko Hasegawa, MiyokoMatuo , Uncertainty and Its Related Factors in Patients with Chronic Hepatitis C, The World Academy of Nursing Science (WANS), 20th September 2009, Kobe
② 長谷川智子，松尾ミヨ子，インターフェロン療法中の C 型慢性肝炎患者における医師の説明に対する満足度，日本慢性看護学会，2010 年 6 月 26 日，札幌
③ 長谷川智子，壮年期の C 型慢性肝炎患者におけるインターフェロン治療中の経験と治療後の思い，2011 年 6 月 26 日，岐阜

６．研究組織
(1)研究代表者
長谷川　智子（HASEGAWA　SATOKO）
大阪府立大学・看護学部・助教
研究者番号：40508800